

数ありました。復元模型やVTRも不評と好評と両方の意見があります。万人が満足できる展示はむずかしいと痛感しました。全体としては好意的な評価が多く、まずまず成功といえるでしょう。本展をみて興味をもち、実際に現地を訪れた方が飛鳥藤原宮跡発掘調査部の展示室にもお見えになっています。

また本展と関連して、大阪・東京会場に出展した金銅製四環壺（明日香村古宮遺跡出土、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）の調査を宮内庁と奈良文研が共同で実施しました。このように展覧会とともに新しい研究もおこなわれています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 石橋茂登）



発掘調査の概要

興福寺中金堂院回廊東南の調査（平城第347次）

興福寺の主要伽藍を対象とした復元整備計画にもとづき、これまで中金堂院の中門（1998年度）、回廊東北部・中金堂前庭部（1999年度）、中金堂（2000・2001年度）の発掘調査をおこなってきました。今回は回廊東南部を発掘しています。調査面積は981㎡、2002年7月1日から調査を開始しました。この調査により回廊の全容が明らかになりました。

東面回廊は全長約65m、中門を含む南面回廊の全長は約84mあります。今回の調査で検出したのは東面回廊南半の桁行8間分、南面回廊東半の桁行6間分です。梁行は東面、南面回廊とも2間で回廊基壇の幅は10.74mです。柱の礎石はほとんど残っていませんでしたが、礎石の抜取穴によって柱の位置を確認できました。回廊は連子窓が中央に通り、その両側に吹き放しの廊下がある複廊の構造であったことがわかります。

東面回廊西側と南面回廊北側では基壇側面を飾る外装と雨落溝を検出しました。凝灰岩製の地覆石とその上にのせる羽目石の下端部が残っており、全体は壇正積基壇であったと考えます。雨落溝は川原石を2列に並べて底石とし、側石を立てています。溝の内庭側には川原石を敷き詰めた幅90cmの石敷がありました。

今回の調査区で東面回廊の最も北の柱間にあたるところに、内庭側に下りる階段の痕跡を検出しました。階段北側の地覆石があり、雨落溝は階段の出にそって西に張り出しています。この階段の存在によ

ってここに門が開くことを推定できました。階段の幅は約4.1m（奈良時代の尺で14尺）、門の柱間も14尺であったことがわかります。

門は東面回廊の中央より一間南に位置し、これを境に北と南では、桁行の柱間寸法が異なっています。これは最初に門の位置を決めて、門を基準に回廊を北と南に分けて、必要な間数で割り振るという設計順序の結果であろうと考えます。さらに門の中心線を東西に伸ばすと東金堂と西金堂の中心と一致します。東西の金堂は中金堂院より遅れて造営されていますから、この両金堂は門から延びる軸線を基準に設計されたことがわかります。つまり門の位置は回廊を設計する基準であるとともに、周辺の伽藍を設計する際にも基準となっていたと考えられます。

今後は回廊基壇の時期や構造、回廊内側の内庭部分の状況を把握することを中心に、調査を継続します。

（平城宮跡発掘調査部 今井晃樹）



調査区全景（西から）

平城宮第一次大極殿院西楼出土の木簡

西楼の調査で多数の木簡が見つかったことは前号で報告しましたが、その後も現場から持ち帰った木簡を含む土から遺物を洗い出す作業を続けています。持ち帰った土はコンテナに400箱あまりです。

木簡が見つかった穴は、西楼の全部で16基ある掘立柱の柱穴のうち、実に13基に及びます。柱抜き取り穴は深さ3mにも及ぶ巨大なものですが、深さ1mあまりのところに帯状に堆積した木屑層があり、木簡は主にこの層から出土しました。どの穴も抜き取り穴を埋める最終段階で、木簡を含む木屑を集中的に投棄しているようです。ただ、地下水の状況があまりよくなく、木簡は本来もっとたくさんあったと考えられますが、木屑層が腐蝕してしまっている柱穴も多数ありました。

この他、大極殿院南面の築地回廊の造営に先だっ



「此所不得小便」の木簡
(このところ小便するを得ず)

(平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏)

て周辺を整地した土からも、国郡里制（701年～717年）の表記の荷札などの木簡がみつかりました。平城遷都に伴う大極殿院造営段階の史料として注目されます。

現在、木簡の洗い出しとともに鋭意整理・解読を進め、秋の発掘速報展（11月1日（金）～21日（木））で西楼出土木簡を公開・展示できるように準備を進めていますので、ご期待ください。

藤原宮朝堂院の調査（飛鳥藤原第120次）

8月末、5ヶ月間に及んだ調査がようやく終了しました。場所は藤原宮朝堂院地区の一郭です。朝堂東第二堂と呼ばれる建物と東面回廊について検証するのが、今回の調査の主な目的でした。この場所は戦前、日本古文化研究所によって部分的な発掘が行われていますので、建物規模などの大枠はわかっています。そのため「改めて調査をする必要があるのか」という声も聞こえなくはありませんでした。

しかし、やはり発掘はやってみるものです。古文化研究所は発掘成果にもとづいて、東第二堂を桁行15間、梁行4間に復元していました。ところが、今回改めて全面的な発掘をしたところ、実は梁行5間であったことが判明しました。東第二堂は、孫庇が朝庭部分に張り出すという、これまでに例のない特異な構造をもっていたのです。

また東第二堂は基壇をもつ瓦葺き礎石建ちの建物でありながら、床を貼っていた可能性も、今回の調査で新たに浮上してきました。

ともに、これまでの「常識」をくつがえす重要な成果といえます。しかも、これらの点がわかったのは現地説明会の少し前のことでした。なかでも梁行5間という知見は、現地説明会のわずか3日前に得たものです。全く冷や汗ものでした。

7月20日の現地説明会では、猛暑にもかかわらず500名近い人が集まり、熱心に耳を傾けてくれま



現地説明会のようなす（紙筒を立てて柱位置を表示）

した。調査部一同、心より感謝しております。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹)

藤原京右京八条一坊の調査（飛鳥藤原第123次）

橿原市飛騨町において、市営住宅建設の事前調査として2002年7月からおよそ1ヶ月間、約200㎡の発掘調査をおこないました。今回の調査地は藤原京の右京八条一坊西北坪にあたります。この坪は過去の調査によって、整然とした建物配置をもつ藤原宮期の貴族の邸宅であることが判明しています。その建物群の続きを確かめることが調査の目的でした。

調査地の西3分の1は飛鳥川の氾濫により大きく削平を受けていましたが、調査地の中央付近で倉庫と思われる2間×3間で総柱の掘立柱建物を検出しました。この建物は過去の調査でみつかった周辺の建物と位置を揃えており、貴族の邸宅の一部とみなされます。これにより、坪内の計画的な建物配置がより鮮明になりました。

また鎌倉時代の溝や柵のほか、白磁碗と瓦器碗、瓦器皿が重ねて置かれていた土坑もみつかりました。これは地鎮のまつりに伴うものと思われ、中世の土地利用の一端もうかがうことができました。

面積は小さいながらも着実な成果が上がり、担当者はホッと胸をなでおろしています。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 前岡孝彰)



藤原京の掘立柱建物（北から）